OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	紅葉の方法 ： 「拈華徴笑」を中心として
Author(s)	岡, 保生
Citation	語文. 1952, 5, p. 33-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68398
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紅葉の方法

――「拈華微笑」を中心として――

岡保生

一

明治廿三年一月「国民之友」附録に発表された「拈華微笑」といふ短篇がある。これはそれまでの紅葉作品の系列からみると、明かに異色篇といってよい。すなはちその前年出世作「色懺悔」を公刊して以来、「やまと昭君」「風雅娘」、或ひは「関東五郎」の如く、紅葉作の題材は多く過去に求められ、近世文学の伝統が色濃く滲出てゐるのみならず、「江戸の水」の如きは、「いづれも様御存じ。江戸の水は本町庵三馬家伝の売薬。」とわざわざ断ってゐるほど、三馬の模倣を敢てしたりしてゐるのである。また「南無阿彌陀仏」は、津波梅といふ主人公が明治廿二年四月二日に歿したことにしてゐるので、一応当代の世相に材を求めたやうに考へられるが、中味はきはめて古く、継母に虐待されて苦しむ姉妹、先妻の遺託にこたへてあくまで彼等を庇ひ忠義をつくす乳母及びその甥等を中心人物として、不治の病に冒されて呻吟する姉が、つひに会ふことのできなかった乳母の甥に深く思ひを寄せ、漸く届いた写真をかたく抱きしめながら死んで行くといふストーリーは、明かに近世文学の中にその類型が見出されるであらう。

かかる作品を公けにしてゐた紅葉が、この「拈華微笑」に於いて、当代世相の中に題材を求めようとしたのである。

ある下級官吏が、毎朝出勤の途中、車上の美人に出遇ふ。顔馴染となり、互ひに挨拶を交はすうちに、やがて恋愛に進行する。しかし、それを打明けることもできず、相手の心もなほはっきりとはつかめないままに、あれこれと物思ってゐる。ところが、ある事件が契機となり、双方の誤解を招いて、やがて女はドクトル丸山某と結婚してしまふ。以上が「拈華微笑」のあらすじである。

この作で注目すべきは、紅葉が当代の下級官吏を主人公とし、その平凡なる日常生活の行きずりの恋愛をテーマとして、主人公の心理を描いてみせようとした点にある。下級官吏の青年を主人公とし、その恋愛心理を描写した作品としては、いふまでもなく二葉亭四迷の「浮雲」（明治廿年）といふ先蹤がある。そして「浮雲」が、文三・お勢・昇らの性格乃至心理の描写を通して、やがて時代そのものを明瞭に、全円的に描き出してゐるのに比べれば、紅葉の本作は所詮問題とならず、むしろその軽妙な筆致を買ふべき「瀟洒な」

（徳田秋声「尾崎紅葉研究」）スケッチにすぎないともいへよう。田山花袋の言葉によると、この作は、そのとき同時に「国民之友」に発表された鷗外の「舞姫」のために全く圧倒されて了ったといふことであるが（花袋「近代の小説」）、それはおそらく必然の成行であったらう。

しかし、それにしてもこのやうな題材に進んで筆を着けて、依然面白をかしく物語らうといふ潜在意識から、ややもすると話術のみが先走ってゐる嫌ひはあるが、この作の前半のみを取り上げるならば、紅葉のリアリズムは少くとも本格的な成長を予見せしめる萌芽を見せてゐたといってもよいであらう。

ところで、この小説のプロットを問題にするとき、前記梗概からも察せられるやうに、本作の後半、当事者両人の誤解を招き、やがて破局への途を暗示する一事件が、いはば本作のヤマと見なすことができよう。それまでは、徐々ながら両人の恋愛は順調に進行してきた。このままで行けば、二人の前には幸福が訪れることは必至だ。読者はそれまで、どちらかといへば、ややまどろこっしい感じを抱きながら、随いてきただけに、早く二人の結ばれることを期待しながら、読みつづけて行く。と、一転、物語は全く逆の方向へ進みはじめる。そしてやがてもたらされるのは、失恋といふ結果に他ならない。（もっともこの小説の結末は特に戯作調が濃厚で、失恋の悲哀とか深刻味は全然感じられない。）

この大きな転回を見せる一事件とは、具体的にいへば、「十一月の二日は亡父の命日。母と妹と此男三人連にて、谷中天王寺へ参り、南無阿彌陀仏と花を手向けて戻り道」に、例の美人が若い男と連立って、母親と従者を従へて来るのに出会ったことである。そして二人はともに、もうそれ〴〵結婚してしまってゐるのだと誤解してしまふ。この誤解が引き起した悲喜劇、これこそ紅葉の本作に於いて狙った第一のモティーフなのだ。現実の人生においても、またかうした誤解にもとづく悲喜劇は、いくらでも見られる。人生の一面はたしかにさういふところにあるといってよいのだが、紅葉が始めからさうした点にのみ主眼をおいて、この作を構想していったと見られるところに、彼の所謂趣向主義とこの小説の底の浅さが露呈してゐる。

私はいま、紅葉のこの作におけるモティーフは、誤解から引き起こされる悲喜劇を描くことだといった。さらに、それを突込んでいへば、紅葉は先づ、この「拈華微笑」において、前記谷中天王寺の墓地における男女の邂逅、そして二人のおかれた其場の境遇から、ともに誤解するといふ、一つの情景を設定したことであらう。さうして、それを効果あらしめるために、そこへ到達するまでの緩慢なる恋愛の進行を、次に構想していったのではなからうか。私はこのやうに考へてゐる。

二

情景。あるひはシーン、場面などいろいろ呼ぶことができよう。一体、小説において、場面の重要性はいふ必要もないが、紅葉ほどよくこの場面について語ったものは、明治の作家中でも、あまりあるまい。「新著月刊」第三号（明治三十年六月）に載った「作家苦心談」によれば、紅葉は「小説の結構」といふ問に対して、次の如く語ってゐる。

私は始め極漠然とした事柄……いや概念も概念も非常に疎い概

念を先に拵えましてね、例を取れば『金色夜叉』で云ふと、ラブの為に性質が一変してしまって、激烈なる高利貸になる、と云ふ考へをきめ、其れから始まりと真中と収結とをきめます。詰り初中終の三つをきめて又其の小割を三つ位にする。斯うざっとの場割位までは考へておきます……

ここでは場割といふことばを用ゐてゐるが、この場割を先づいくつか設定し、それを後でつないで行く。いはば歌舞伎風の構成をとることが、彼の常套手段であり、それが新聞小説とマッチして、いはゆる紅葉文学の性格を決定づけていったと見ることができる。

誰もが知るやうに、出世作の「色懺悔」がすでに、『信長記』から何かに、若武者が雪の中で討死するところ」から思ひついて、「卯の花威の鎧でも着た若武者が、討死をするてな」場面を先づ設定することによって書かれたものであり、「おぼろ舟」（廿三年）また冒頭の「口入屋のところをかいて見たかったので」「西鶴風でやった」と、例の「五人女」巻三「姿の関守」の手法にもとづく場面の設定から生れたことを語ってゐる。（「作家苦心談」―なほこの項については近藤忠義氏「尾崎紅葉」（「明治文学作家論上」所収）参照）

「拈華微笑」においても、このやうな手法のとられたことは、想像に難くない。さうして、この点において、示唆を与へるものは、「紅葉遺文」（四十三年）所収の「恋の奥津城」と題する一文である。比較的短文であるから、全文を左に写してみる。

七月の墓参の日、赤坂某寺に一青年一佳人と累塚の間に擅見す。男は彼を郎の魂を弔ふ者となし、女は又彼を婦の墓に詣づるものとなして言はず語らずの間、互に神往き魂通ふ感あるまゝに、おのづからなつかしきやうにて看一看す。

実は男は友人の為に、女は其伯父の為に掃展するものにて、些の恋あるにあらざるを互に忖度臆測して情を動し其夜互に夢見るばかりに思ひき。後々迄も此の可懐しさを忘れず。

一読して知られるやうに、これはもちろん「拈華微笑」と何等の関係も持たない。否、それよりも、むしろその逆の場合だといふべきであらうか。

それはともかく、ここに設定された場面こそは、「拈華微笑」とほゞ似通ってゐると考へられるものである。このやうな場面を、紅葉がノートしてゐたといふことは、いま問題にしてゐる「拈華微笑」の場合においても同様だったと推測することを可能ならしめるものであり、あながち一片の空想と片付けられることでもなからうと、私は思ふ。

もちろんその場合、それは細かいところまで計量された精密な場面ではなかったであらうが、少くも具体的に脳裡にくっきりと描かれた一齣であったことは、この「恋の奥津城」から想像されるのである。さうして、紅葉はそれをおし進めて、どのやうにして明確な形象化をなしとげたか。この点はやはり前引の「作家苦心談」によって、ほゞ察知しうるのである。すなはち、右「苦心談」によると、例へば或男と女が暫く間絶えて、偶然邂逅したと云ふことにすれば邂逅した時候は花の咲いた頃で、奈何いふ場所でといふ位までは考へて置いて、いよ〳〵書く時に、花は桃か、桜か場所は上野か、向島かときめ、女は奈何いふことで出て、何処でどういふ具合に出あって、料理屋に這入るのはきまりが悪いからと云ふので、其所らをぶらついて話したとか、或は水茶屋の奥に這入ったとか云ふことは筆を執る際にきめます。

と語ってをり、「拈華微笑」における谷中天王寺の墓地、女が休茶屋から立出でての登場、男が路傍の石碑の墓誌を読み終ったとたんに顔を見合はせる件等々、その細部にわたる描写は上記「苦心談」から大体推測できると思はれる。

三

かくして「拈華微笑」の如き、一見かなり「写実的」傾向の短篇も、その成立過程を考察するならば、「色懺悔」以来の作風を襲うたにすぎないのである。

そしてこのやうな場面場面に力点がおかれた小説構想は、読売新聞の連載小説を発展するにいたって、ますます甚だしく、うら若い女性の全裸モデルとなる場面を書くためにのみ作られたかの如き「むき玉子」（廿四年）や、冷熱二つの場面を対照せしめようとした「冷熱」（廿七年―中絶）の如く、題名だけで大体が推測される作品さへ書かれてゐるのである。

ところで、このやうな傾向は、さきに少しふれたが、歌舞伎的―ドラマティックなものといへる。紅葉の演劇、戯曲に対する親近性を呈示してゐると見ることもできよう。

紅葉が化政度文化の情趣を享楽しつつ、「我楽多文庫」時代を過し、演劇に深い興味と関心を有してゐたことは、明治廿三年の一月、かれら硯友社同人がはじめて文士劇を試み、その後も再三演じてゐることで、明かに看取される。（江見水蔭「硯友社と紅葉」等）

のみならず紅葉には、「元禄三人形」といふ脚本もあり（廿五年の作―江見水蔭前掲書）、また「色懺悔」の脚色上演に際して、「訣別の巻」といふ一幕を新たに書加へたりしてゐる（同年―同水蔭著による）。モリエールの戯曲を翻案した「夏小袖」（廿五年）や「恋の病」（廿六年）等は周知の事実である。

かういふ事実を数へ立てる必要はないであらう。彼の生ひ立ち、環境、交友、教養等、すべては彼の文学にドラマティックな傾向を与へたのだ。

紅葉が今少し長生きしたら小説よりは脚本にヨリ以上成功したらう。最後の落付き場は或は劇作家であったかも知れない。

と内田魯庵は語ってゐるが（「思ひ出す人々」）、紅葉文学をよく見きはめた言といふべきであらう。

紅葉は「拈華微笑」以後、「恋のぬけがら」「此ぬし」「巴波川」等をこの廿三年に書いてゐる。いづれも当代「写実物」と見てよい。そのなかで短篇ながらすぐれてゐるのは、塩田良平氏も指摘せられたやうに、「巴波川」であらう。（塩田氏「尾崎紅葉」〔河出書房「日本文学講座」第五巻所収〕）

さうしてこの作について、塩田氏が右「尾崎紅葉」の中で、

特に下の巻の発端、お蔦が団扇で螢を招きよせて青木に見せる情景の色めかしさは、源氏物語にもその比を見ない。（傍点は筆者）

と説かれ、それに続けて「其日暮、二人欄干に腰かけて涼みけるが、……」とその辺の原文を引用してをられるが、氏の説かれるとほり、この作で最も強く印象に残るのは、たしかにこの情景であらう。それは恰も舞台面から切取ったやうな美しさであり、その絵画的情趣は読者をして自づと歌舞伎の世界を連想せしめるものがある。このやうな印象的な場面を生むに至った背後には、前述紅葉の演劇に対する傾倒が潜んでゐたことを忘れてはならないであらう。

四

さて、作家紅葉の成長のあとを眺めると、「心の闇」（廿六年）以後、漸く本格的な写実主義の傾向に進み、特に「多情多恨」（廿九年）は紅葉リアリズムの頂点を示す一代の傑作であったとは、従来の文学史が説いてゐるところである。この後期紅葉文学については、具体的に一々の作品にふれつつ、考察を進めねばならないと思はれる。が、最早その余裕はないので、今はその中の代表作である「多情多恨」をとりあげて考へてみよう。

この作品の主人公鷲見柳之助の心理描写の精細さとか、葉山誠哉はじめ主要人物の性格描写の成功とか、いづれも後年田山花袋、正宗白鳥等自然主義文学者たちが紅葉山人唯一の名作と評価した所以であり、その構想においても「極あっさりした縞柄の織物」（網島梁川「多情多恨合評」「早稲田文学」第七年第一号所収）にたとへられるやうな、事件本位のそれでないこともひろく知られてゐる。しかしこの作品においても、描かれた場面々々の構図、転換等の工夫には、やはり紅葉独自の方法が見られると思ふのである。その著しい例としては、後篇の第二章、待合の場面があげられよう。鷲見の亡妻によく似た芸者がゐるから、それに会はせて慰めようといふので、葉山は鷲見を連れて待合に入る。ここから第二章は始まるのだが、この章に於ける作者の眼は、決して綿々たる追慕の情に瞬時として亡妻を忘れ得ない鷲見の心情には注がれてゐない。まして、友人葉山の義侠心とか鷲見への親身の愛情とかは、関心の外にある。「貴方こそ肖てゐる癖に」といはれたのを受けて、「乃公のにてゐるのは土鍋のお粥さ」と酒落のめす通人葉山と、野暮ったく芸者を見つめて「肖て居らんものは肖て居らんものぢやないか」と突放し、「行かう、もう十時だ。」と帰る鷲見と、その間にはさまってまごつく芸者と。彼等の描写を通じて、日清戦役後好景気の波に乗り隆盛に赴いた当代の待合遊興の風俗を写し出すところに、作者の興味は集中してゐるのである。

それは紅葉生来の傾向であり、一方時代的好尚に対する敏感さを示すものでもあった。が、作品そのものに即していへば、此処は前篇以来のじめじめした家庭内の空気から一転させるために、予め用意された劇的場面の一とみることができる。

なほ、この章については、田山花袋が「モデルがあっても、作者が面白がって書いて居るところは、屹度その真相が出てゐない。葉山と鷲見と、待合に行くところなどはその好い例である。」（「花袋文話」）と評してゐるが、自然主義者花袋の口吻をよくあらはしてゐる言葉である。そしてその花袋が「兎に角全体のコンポジションがライフライキと言ふ処を覗って居る」（前掲書）と評価してゐるにもかかはらず、このやうな場面を構想せずにはゐられなかったところに、かへって紅葉の面目は出てゐると思はれるのである。

以上、近代文学への過渡期を代表し、明治文学の進路を開拓した作家尾崎紅葉の方法について考へてみたが、紅葉文学の美は、その艶麗なる情景描写にあり、かれ自らさうしたすぐれた感覚的資質を有ち、たえず把持したその方法にもとづくことを、改めて認識したいと思ふのである。

— 宇治山田商工高等学校教官 —